

令和4年度自己点検・評価について

—本学における研究所・キャリア教育・留学生(国際交流)・(報告書)—

「大学は、その教育研究水準の向上に資するため、文部科学大臣の定めるところにより、当該大学の教育及び研究、組織及び運営並びに施設及び設備(次項において「教育研究等」という。)の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする」と学校教育法第109条第1項に定められている。。

本学では、東日本国際大医学自己点検・評価委員会規程第4条にある「本学における教育・研究水準の向上を図り、社会的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について、自ら点検及び評価を行う」に基づき、定例の委員会活動を通じて自己点検・評価作業を進めてきた。

令和4年度は、研究所・キャリア教育・留学生(国際交流)に焦点をあて作業を進めた。以下がその報告書にあたる。

※ なお JIHEE の基準を参考としたが、本年度内で扱った基準に沿った番号付与を行ってゐる。

令和 5年 3月 30日

東日本国際大学 自己点検・評価委員会

基準 1. 特色ある教育・研究と社会貢献

1-1. 大学が持っている人的資源の活用と社会への提供

1-1-① 建学の精神に沿った研究体制の整備

1-1-② 実践的なキャリア教育と就職支援

1-1-③ 公開講座等による地域貢献

(1) 1-1 の自己判定

基準項目 1-1 を満たしている。

(2) 1-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

1-1-① 建学の精神に沿った研究体制の整備

[東洋思想研究所]

研究所は、「義を行い以て其の道に達す」という建学の精神を探求し、儒学を中心に仏教も含めた幅広い東洋の思想、哲学を現代に展開していくことを目的に、平成 19(2007)年 4 月に設立された東洋思想研究会を淵源として、東日本国際大学の中核を担う学術機関として平成 21(2009)年 4 月に設立された。平成 28 年(2016)度に現代儒学研究会、現代仏教研究会、生命文明研究会の 3 部会体制となり、その後、平成 29(2017)年度からは儒学文化研究所と合併し、現代儒学部門、現代仏教部門、西洋哲学部門、そして新たにイスラム思想部門が加わり、4 研究部門体制として新出発を果たすことになっている。また当研究所の研究員は研究分野、所属も含めて極めて多様性があり、各研究員間の対話を通して日々、「知」の探究が行われている。福島県いわき市という地方に位置しながらも、日本の学术界の第一線で活躍する研究者の熱と力を集めグローバル(glocal)な「知」の発信を目指している。

しばらく影響を受けてきた新型コロナウイルス感染症の懸念も緩和されたこともあり、研究部門単位の研究会/勉強会の開催数も以前のように戻りつつある。論語素読教室も感染対策に留意しつつ継続している。

また、現代儒学研究部門、現代仏教研究部門、西洋哲学研究部門、イスラム研究部門の四研究部門の活動は活発で、『研究東洋』を発刊し、その成果を地域社会、一般に公開している。

[地域振興創生研究所]

福島復興創生研究所は、平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災及びその後発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故によってもたらされた地域住民の精神的な負担を軽減し、解消することを目的とした調査・研究を実施するために、平成 29 年 4 月に設立した。

本研究所は「環境汚染」「経済復興」「心の修復」に関する研究及び実践を通じて福島そして日本の知識産業を確立し、持続可能な社会（社会、経済、環境）を構成することを目指している。そのための国際協力も積極的に行っている。このことに関係して、米国ハンフォード地域の大学教職員、自治体研究者、経済調整機関関係者を本学に招聘し、令和 2 年、令和 3 年と継続的に国際会議を開催した。現在も同会議出席者と研修推進にあたり継続的に意見交換を行い、研究成果を挙げている。

[エジプト考古学研究所]

エジプト考古学研究所はエジプトに関心があるという本学の学生にも現地調査への道を開いて参加させ、その中からエジプトの専門家が育つことを目指している。毎年開

催される学園祭の「鎌山祭」では、吉村作治総長の 50 年に及ぶエジプト調査の成果を展示している。本学学生のみならず一般市民も来場し研究の歩みに触れている。

また研究所は公開研究ならびに吉村幼鳥による講演会も実施している。「クフ王墓探査プロジェクト」をはじめ、「太陽の船復原プロジェクト」「ダハシュール北遺跡プロジェクト」などの講演で、毎回のように多くの来場者が熱心に聴講している。

【地域振興戦略研究所】

地域振興戦略研究所は、いわき市をはじめ福島県内の自治体の復興と創生のための提言ができるシンクタンクとしての機能を持っている。具体的な事業として、①産業界、地方自治体のニーズに対応した地域振興策の企画立案、②地方自治体と連携して地域振興を行う人材の育成、③政府や地方自治体が募集する地域振興策や街づくり等の調査研究など行っている。

本研究所が主催して、これまでに公開シンポジウムを開催してきた。教職員、学生だけでなく、地域住民の方も多く参加した。また、地域振興のための研究課題を公募し、その成果をいわき市に報告している。学内では文化祭（鎌山祭）の機会を利用して、学生から地域振興のアイデアを募る「ユニークアイデアコンテスト」を実施している。若者らしいアイデアが発表され、回を追うごとに充実した内容が発表されるようになってきた。

【健康社会戦略研究所】

健康社会戦略研究所は、主にいわき市をはじめ福島県内で暮らす人々の健康社会づくりを研究する研究所である。①健康社会づくりに貢献する医療及び自治体への提言、②①に関係する人材の育成、③政府及び地方自治体等が募集する健康社会づくりに関係した研究への応募などに積極体に取り組んでいる。

また、本研究所はコロナ禍にあって影響を受けてきたが、令和 2 年に米国やハンガリー一の研究者と連携して「東日本大震災と原発事故からの 10 年」と題する国際シンポジウムを開催した実績を踏まえ、今後も市民公開型の研究会を実施していく。

【次世代育成実践・研究センター】

令和 4 年に設置された東日本国際大学・いわき短期大学「次世代育成実践・研究センター」は、次世代を巡る諸課題について、地域社会と協働して多角的な支援活動を展開するとともに、横断的かつ学際的な調査研究を推進していくことを目的にしている。

当面の活動として、同じ法人下にある通信制高等学校や幼稚園に焦点をあて不登校の問題や発達面に課題のある生徒や幼児などに関する支援を展開している。「誰一人取り残さない教育」を目指した研究や実践、学習会を推進し、研究会や公開シンポジウムを開催してきた。今後も公開研究会や研究誌の発刊を通じて地域社会に研究成果を還元していくが、今年度はそのための準備期間としてセンター内部での組織面、研究面の整備を進めた。

そのほかにも、本学には「森田実記念地球文明研究所」「グローバル人財育成研究所」「比較文明研究所」「高等教育研究開発センター」があり、それぞれが研究所の設立目的に沿って今年度も活動を展開した。

1-1-②実践的なキャリア教育と就職支援

【e ラーニングを利用した教育】

本プログラムは、資格・検定の取得試験対策に定評のある TBC 学院（栃木県宇都宮市）

等と提携し、同校の持つ高い技術によって制作された資格取得コンテンツを、「いつでも」「どこでも」学べるプログラムである。

このプログラムにより、例えば長期休暇期間中やクラブ活動などの合間を活かしながら時間と場所を選ばず勉強をすることが可能になる。プログラムは全 16 コースで、国家試験から民間試験まで、昨今の就職状況を考慮しコースを選定している。社会で即戦力となる資格を取得することで、学生の就職をより一層強化・支援している。

[充実したゼミ教育]

本学では、1 年から 4 年生まですべての学生がゼミ教育を受けており、それも 10 人程度の少人数ゼミである。例えば、企業とタイアップした問題解決型のゼミ (PBL) がある。これは、問題や課題を解決するために、日ごろ学んだ知識を活用して調査・検証しながら取り組む実践型教育であり、主体的に学習していく教育プログラムである。すでにいくつかの企業との協力関係を結んでおり、たとえば地元の大手スーパーのマルトの協力を得て、大学から現場にフィールドリサーチしたり、担当者をゼミに招いたりして、学生たちが小売業界の調査・研究をしている。また、インターンシップを専門的に実施しているゼミなどそれぞれ特色のある多様なゼミが学生たちに用意されている。

[アクティブ・ラーニング]

本学では、単に教員の授業を聞くだけでなく、自ら積極的に参加するアクティブ・ラーニングを導入している。指導内容を充実させるために外部講師を呼んで、アクティブ・ラーニングに関する研修を実施した。また、アクティブ・ラーニング専用の教室を利用してのゼミ活動を増やすなどして、その成果を体験できる機会を多くしている。

[アウトリーチに基づく就職支援]

アウトリーチとは、福祉等の分野で用いられる、直接出向いて必要な支援をすることを意味する。本学の強みである就職率 100% を達成するためには、就職ガイダンスに出席しない学生や就職未登録者等の学生層にどう対応するかが重要な課題である。

本学では、特に就職活動に消極的な学生をピックアップし、彼らに対して積極的な働きかけをすることによって主体的な行動を促している。例えば、本学の学生を毎年採用している会社を 1 社だけ本学に招き、数名の学生を面接させ、そのうちの 1 人を採用してもらったり、また、逆にこちらから数名の学生を引率して、工場や事務所に訪問し、そのうちの 1 人を採用してもらうような地道な活動を行っている。これらの活動によって、就活にあまり熱心でない学生をできるだけ早期に就職させることに成功している。個別支援に相応しい地道な活動を展開している。

1-1-③ 公開講座等による社会貢献

[人間力育成講座]

本学では心の復興を担う人間力を備えた人材を育成することを目的として、平成 25 (2013) 年度から公開授業として「人間力育成講座」を開講した。「人間力」とは、「義を行って其の道に達す」という建学の精神を体現した「人のために行動する力」のことであり、一言で言うならば「思いやり」のことである。本学の掲げる人間力は古来、儒教では「仁」、仏教では「慈悲」、西洋世界では「愛」として、古今東西を通じて最上の徳目とされてきたものである。

「人間力育成講座」はそうした人格の基盤となる人間力を育み、福島、東北地域の心の復興をもリードしていける人材の育成を目指している。具体的には全 15 回の授業のうち、4 回は各界・各分野で活躍する第一人者による講演会を行い、残る 11 回の通常

授業では 1) 傾聴の態度、2) アサーティブな表現力、3) 目的の創造力という三つの到達目標を目指し、心理学や社会学に関わる理論学習とともに、ロールレタリング、カウンセリング、グループディスカッションなどのワークを行っている。例年、社会人や地域の受講者も受け入れており、年齢、国籍、教員と学生といったあらゆる垣根を超えて、毎年の授業が作りあげられている。

【昌平塾】

東日本国際大学では「いわきから世界へ」を合言葉として、これまでも多彩な知識人の理解・協力のもとで活発な学術活動を続けてきた。

平成 26 年(2014)度からは、本学の客員教授であり、評論家として活躍する森田実氏を座長、また吉村作治学長をオブザーバーとして、本学の東京事務所(早稲田)にて「いわき発の新しい東洋思想」の確立を目指す「昌平塾」を開講した。

平成 28 年(2016)度からは 3 研究部会がそれぞれに定例講座として昌平塾を開講する体制となり、平成 29(2017)年度からは 4 研究部門(現代儒学・西洋哲学・現代仏教・イスラム思想)がその体制を引き継ぐ形で運営が行われている。

また、こうした研究部門ごとの定例講座とは別に、研究所が一体となって行われるシンポジウム形式の特別講座も開講されている。現在、こうした研究部門ごとの定例講座、そして研究部門を横断して行われる特別講座、この両者を総じて「昌平塾」と称している。これからも昌平塾の使命である「いわき発の新しい東洋思想」の確立を目指し、古典の智慧をひもときながら、現代が抱える諸問題を解決する糸口を見出していく。

【論語素読教室】

現在、世界も日本もめまぐるしく変化しており、私たちは何を基準に善悪を判断したらよいかさえ分からなくなっている。そんな時代だからこそ先人達が学び、残してくれたものをもう一度ひもとき、時代や社会の変化を乗り越えて必要な「人間としてのあるべき姿」を見つめ直していきたい。また、2500 年もの長きにわたって生きてきた『論語』にこそ、いつの時代にも必要とされる叡智が生き続けているのである。この「論語素読教室」には、地域の住民であれば、受講料は無料でいつからでも参加できる体制を整えている。開催日時は、毎月 3 回で、原則第 2、3、4 土曜日の午後 1 時から 2 時 30 分までとなっている。

【論語サークル「いわき論語塾」】

日本全国の大学には、その名が知られた特色のあるクラブ・サークルがある。本学にも、建学の精神である儒学・『論語』に基づく、他学にはない特色のあるクラブ・サークルを設立したいとの思いにより本会の発足に至った。本会・論語サークル「いわき論語塾」は、震災より力強く立ち上がろうとする、この「いわき」の地にて、東洋の叡智の結晶たる『論語』を学び、松下村「塾」のように闊達に議論を行い、この地「いわき」より新たな学びの地平を開くことを理念とし、積極的な活動を行っている。

基本的な活動としては、各学期に『論語』を題材とした読書会・討論会を計 6 回行い、その内容を編集し、紀要「知新」として公表している。読書会は次回の討論会のテーマの設定と読み合わせを行い、討論会では学生各自が『論語』の章句の訳稿を持ち寄り、それを題材として参加者有志によって議論を行う。また紀要「知新」の編集作業においても、学生中心で文字起こしから編集・校正まで担当している。東アジア共通の古典である『論語』に依拠して、楽しみながら広義の人間力を育成していくことを主眼としている。

なお本会は学生中心という形態をとりながらも、一般人の入会も認めている点を特徴

とする。東洋の叡智『論語』の人間的な学問の意義を地域社会に還元すると同時に、学生も高い人間力に触発されることを目的としている。開催日時は、毎月読書会1回、討論会1回で、読書会は第2木曜日の18時～19時30分、討論会は第4木曜日の18時～20時30分となっている。

【いわきヒューマンカレッジ】

本学のあるいわき市では、市民の高度で専門的な学習ニーズに応えるために、平成9(1997)年より「いわきヒューマンカレッジ(市民大学)」を開学している。本学は、会場を提供するとともに、年度ごとにテーマを決め本学の教員が講義を担当している。

(3) 1-1 の改善・向上方策(将来計画)

混迷の度を深めている現代世界では、平和的な思想である儒学が大きな役割を果たすのではないかと考えている。そのような状況の中で、本学の研究所等は、儒教、仏教、道教などの東洋思想研究の中核的な拠点大学となることを目指している。また、原発問題を抱えたいわき市の復興のために、有意な人材を養成するとともに、現在もなおいわきに避難している多くの人々のために、公開講座等を通じて心のケアにも役立ちたいと考えている。

また、就職支援の分野では、実践的なキャリア教育と就職支援体制を整備し、より多くの学生が安定した企業等に入ることができるように、就職先の質をいっそう高めていくことを目指している。

2. 国際交流

2-1 留学生の教育及び外国大学との交流

2-1-① 留学生の支援

2-1-② 卒業留学生の活躍とフォローアップ

2-1-③ 外国大学との学術交流

2-1-④ 儒学の国際シンポジウムの開催

2-1-⑤ 海外短期留学(英国)

(1) 2-1 の自己判定

基準項目2-1を満たしている。

(2) 2-1 の自己判定の理由(事実の説明及び自己評価)

2-1-① 留学生の支援

【留学生に対する対応】

本学は開学当初(1995年)から全学体制で留学生を受け入れており、国際部が中心となって、学習のサポートはもとより、留学生が安心して日本での生活を送ることができるよう親身になって支援している。住居の紹介をはじめ、いわき市内の各企業から様々なアルバイト情報を収集し、留学生に提供しているほか、在留ビザの更新申請の取次など、どの分野でもきめ細かなアドバイスを重ねている。これらの評判が各国に口コミで広がったことが、留学生を獲得する上で大きな力となっている。

【留学生の交流イベント】

本学では、地域の人々と留学生とのさまざまな交流プログラムやイベントを企画している。多くの日本人と交流するなかで日本文化を肌で感じるとともに、自国の文化を紹

介する活動などを通して、日本語活用のスキルアップと、異国の文化を理解し真の国際人を育成することを目指している。国際交流会や日本語弁論大会への参加、地元小・中・高等学校への訪問と児童・生徒たちとの交流、「留学生と市民の集い」などを積極的に推進している。例として、毎年開催されている「外国人による日本語弁論大会」（国際交流基金、国際教育振興会主催）等では、本学の留学生が優秀な成績を収めている。

また、各国から入学している優秀な留学生が、福島県の「今」を発信する多言語ウェブサイト「いわきグローバルネットワークプラス（GLOBAL NETWORK+）」というインバウンド情報発信のチームの一員として、母国に福島の現状を発信する活動も担っている。これは、日本私立大学団体連合会が以前発行したパンフレットにも「明日を拓く私立大学の多様で特色ある取り組み」の事例として紹介されたこともある。

2-1-② 卒業留学生の活躍とフォローアップ

本学で学んだ留学生が、母国に帰って日本で培った経験を活かして活躍している例も少なくない。OB会を組織しているところもあり、本学との密な連携を通して、現地の生徒に本学の最新情報を提供することにより、本学に留学を希望する生徒も少なくない。こうした現地の卒業生の活躍もあり、近年の留学生は以前と比較して日本語能力のレベルも高く、質が向上している。

2-1-③ 外国大学との学術交流

本学では、海外の大学との学術交流が盛んであり、多くの大学と姉妹校協定を結んでいる。近年では特に韓国の成均館大学校儒学大学とは、建学の精神を儒学に置いているという共通点もあって、平成 8(1996)年に姉妹校の協定を結んで以来、20年以上の長きにわたって友好的な関係を築き、平成 24(2012)年には同儒学大学の徐炯遥名誉教授を本学の儒学文化研究所の所長として招聘するとともに、平成 25(2013)年には成均館大学校の李基東教授を「孔子祭」に招き、「『論語』幸福論Ⅱ 東アジアの平和と儒学文化」と題する記念講演をしていただいた。さらに、平成 30(2018)年の「孔子祭」においては、成均館大学校の儒学大学院・院長である辛正根教授を招き、「21世紀の儒学を相対的に定義する」と題して記念講演会を開催するなど、今日まで実りある学術交流を深めている。

また、平成 23(2011)年に中国・山東大学と姉妹校協定を結び、同年より山東大学と成均館大学と本学の 3 校による日中韓国際学術シンポジウムを開催している。令和元(2019)年度には中国・山東大学が幹事校となり、中国・青島において第 8 回日中韓国際学術シンポジウムを開催した。

さらに、平成 28(2016)年 9 月には韓国の慶南大学校と「教育研究及び学術交流に関する協定書」を結び、研究資料及び研究論文の交換、研究及び研修のための教職員及び学生の交換・交流、ゼミナール、学術会議等の共同開催などを約し合い、平成 29(2017)年 4 月に本法人の理事長、学長ら一行が同大学校を訪問し、今後の交流の在り方をめぐって活発に意見を交換し、具体的な協議を行った。コロナ禍にあって一部交流が延期されたが、令和 5 年度以降再開される予定である。

2-1-④ 儒学の国際シンポジウムの開催

【孔子祭と国際シンポジウム】

「孔子祭」は、平成元(1989)年 6 月 22 日、旧 1 号館に孔子を祀る大成殿が落成したことを記念し、孔子を尊ぶために開催されたことに由来する。記念すべき第 1 回の孔子祭は孔子、そしてその弟子の曾子の直裔を招いて開催され、以後、毎年この日を孔子祭の開催日と定められ、平成 25(2013)年の孔子祭の折には、学校法人昌平巒 110 周年の

佳節を記念する学術活動の一環として第5回日中韓国際学術シンポジウム「グローバル時代の東アジア平和思想」が盛大に開催された。

この日中韓国際学術シンポジウムは1年おきにそれぞれの国における幹事校により開催される仕組みで、第4回(2011年)と第8回(2019年)は中国の山東大学、第6回(2015年)は韓国の成均館大学校、第5回(2013年)と第7回(2018年)は本学において行われ、有意義な成果を得るに至っている。こうした諸活動の内容は、年1回発行される本学の東洋思想研究所・儒学文化研究所の紀要『研究 東洋』を通じ、広く公開している。

2-1-⑤海外短期留学(英国)

本学では、グローバルな視野に立ちつつ、地域社会に貢献するグローバル人材育成の一環として平成28(2016)年春から毎年「英語特別講座(英国)」の研修団を派遣している。同派遣団は東日本国際大学・いわき短期大学の応募者の中から英語のテストと小論文によって選抜された代表から成り、イギリスの南東部に位置する名門校カンタベリー・クライスト・チャーチ大学(CCCU)にて約1か月間にわたり集中講座を受講する。参加した学生は英語力の向上はもとより、異国の歴史と文化にじかに触れ、人々との交流を通して貴重な経験を積み、大きな成長の節を刻んでいる。

令和2(2020)年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、イギリス現地に赴くことはかなわなかったが、約4週間の日程でCCCUの教員から直接指導を受ける形でオンライン授業が実施され、新たな試みによって効果的な成果が得られた。令和4年度には対面型の現地研修が再開した。

(3)2-1の改善・向上方策(将来計画)

本学には様々な国から多くの留学生が在籍しており、地域の期待・要望もあり、卒業後に活躍できるグローバルな人材の育成が重要な使命となっている。現在、地域で活躍する留学生の数は年々増加傾向にある。地域の期待に応えるため、入学時から日本語能力向上・資格取得のサポートを積極的に取り組んでいる。また地域の相互理解を深めるため、留学生と市民の様々な交流イベントや、地域の体験活動を企画し、実施している。今後の更なるグローバル化を図るためにも、新型コロナウイルス感染症の状況が収まりつつある現在、より幅広い国からの留学生の入学を期待し活動を推進する。

令和4年度自己点検・評価（総括）

本学にある研究所は、今年度もそれぞれの設立目的に沿って研究活動を推進している。その過程で進められる研究活動やそこで得られた成果は、本学の教育や研究とも有機的につながり、学部教育に還元され、よい影響を与えている。また、地域にも開かれた研究活動として公開研究会を積極的に推進してきた。今後とも地域社会にも開かれた研究所として展開し、地域社会への貢献につながる成果をあげていくことが期待されている。

また、キャリア教育については、授業方法やさまざまな手法を用いて、将来設計につながる活動を展開している。その中核にキャリアセンターがあり、関係部署や教職員とよく連携をとり、誰一人取り残さない方針でキャリア形成に貢献している。今後ますます多様化する学生の実態が想定されることから、個別支援の充実が課題となっている。

別科ならびに学部には在籍する留学生の存在によって、国際交流の機会が日常的に学内にある。授業、大学行事の場を通じて、学生同士のかかわりが深まり、学生相互の人格形成、成長に好ましい影響を与えている。学生の中には、かかわりへの姿勢がやや消極的で、異文化理解や交際交流の機会を逃している学生もみられることから、より積極的なかかわりを期待し、授業、行事等でさらに工夫を凝らしていくことも必要であろう。

国際部を中心に留学生と地域社会とのかかわりは、関係機関との調整のもとによく計画されている。地域にある学校、団体との交流会の実施や、留学生自ら日本における日常生活の様子を情報発信したりすることで文化交流を行っている。引き続き、国際交流の充実を推進していくことに努めていく。